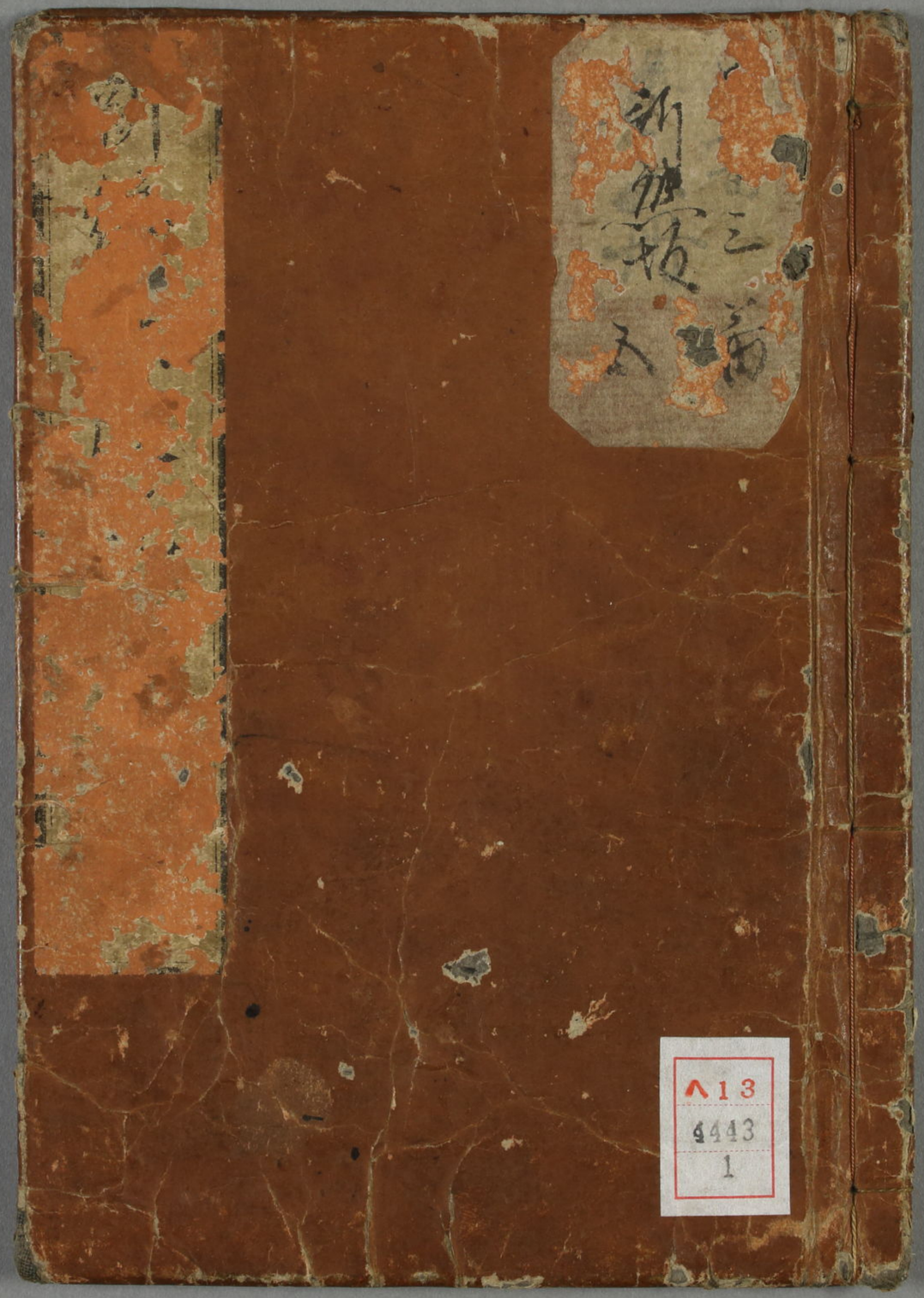

御物帳
三番
五
へ13
4443
1

A13
f443
c2

全五冊

自叙　感和亭

まゝ埋無駄話を傳へ與へよとのたまふ。そのしゝまゝ書しるし。探り見るに。いとゞも花の實法と賢しきものは見ざるこゝろおもひ。中略しと。書て法書に平郎中よりを拾ふ。五拾寒く做き。文ちゝび。語なるべし。甫の者の拙くはゆゝしく拾へゝる甫。

文化乙亥春正月　感和亭鬼武述

熊阪太郎入道長範之像

近江源氏嫡流佐二木常惠冠者季定子。后熊阪左衛門季長依養育成長。强賊首領号熊阪長範。終於牛若九郎冠者手。行年六十三歲而亡。

青墓之長者大炊女兒延壽

三条金商人橘治末春
后堀彌太郎延高ト云

橘治女兒櫻木

牛若九郎冠者之像

龙馬頭源義朝九男。平治元己卯年二月二日誕生。童名牛若九。亦謂舍那王九。於鞍馬山成長。承安頃東奥下向過路。於美濃國青墓驛。賊首討熊阪長範併小賊數輩。后亡平家而号源九郎判官義經。古今獨歩之良将也。

新編熊阪說話目次

卷之一	第一章	熊阪由緒生育之話
	第二章	熊阪太郎武者修行逢三草野四郎話
卷之二	第三章	麻生松雅ノ計策奪黄金殺一婦話 併熊阪看怪首而逢麻生松雅
	第四章	平相國清盛病中秘蔵之薙刀紛失話 併粮退櫻井内記夢物語逢會議
卷之三	第五章	牛若丸於鞍馬山生育之話
	第六章	併金價人三条橘次女兒于牛若憂慕 鍾田兵衛遁危難話 併牛若丸都歩ニ逃東路
卷之四	第七章	壬生小猿妻三谿教旅婦話 併牛若丸到青墓驛
	第八章	長者女兒延壽橘次女兒櫻木倶慕牛若丸話 併櫻木義心伏刃
	第九章	熊阪于青墓長者家推入商議之話
	第十章	賊徒夜討牛若丸働之話 併熊阪長範取期
卷之五	第十一章	飛彈太郎近討手話

通計十一章目次畢

新編熊阪說話卷之一

武江　感和亭鬼武　著

○熊阪由緒生育之話

往昔鳥羽院の御宇。天永年間加賀の國石川郡金澤小塾居住。熊阪左衛門季長といへるもの。もとい近江源氏の嫡流佐々木源治太夫季定の由緒の者なり。江刀ふかりしかの仕向ありて國遠敵し。加賀の国富樫權之助重綱の妻の内縁あるをもて。這を伴ひ今加刀金沢ふ住し。農まなびの名も五郎丸と改め。耕作ものも仏まはせず。自ら家貧しく。女夫共の烟と五十日と送るうちに。一個の男子を出生せり。太郎と号て。他人中の娘と羅麥育つるに。此小兒生質虚弱なるゆゑ。數度のたゆる抱きれ。余も危

おぼふまべ両親も歎ときまゞ療養を尽すに医師のいつくに行
脚弱おる小児よい人参と薬を交へ容色まべ種ふふるるるかひ
おしとるに五鳥又もことを求うんと願ともども人参い容易まふ入る
まゞとふす人知ふ那医のふ中ゝ人参試得るもかたきことあらば
乞丐とたのゝ罪人の刑を行ハゝあらば参ともとうたまんと願
ゆるまゝに即乞丐はたゝ行るぢゝゝ偉其に世に生ゝゝる。
法益の首領木原金剛といつるもの金沢にゐゐて鵜の捕まべ死罪
ゝりぬまべ乞丐晴ゝよ計参とゝり。捧金ふ文てをとゝふ貧に中
ふもを命試助ゝんと家奥を代ゝ。五郎又ハ逢ゝ人参試行て。
大ひよ彼抗逆よ医師のもとふ拿行。調合とたのゝ行まべ快く
諾ひ薬を調へ。ゝ命に振せしむるに浅井よ五郎の新試

捨びたるゝ。疾出し返しまへと。眼を洞を注くと看て店の翁
ゝと根と探汝の勢ゝなる布ゝ。ゝるしふともあてやさうに
みてい。汝拿来るとゝも教がゝとめるに。五郎泣ていいるい試捧
ゝたる布ゝよい過ちて。持捨びたる拘把の鳥と附赤く染なる布
ゝるゝと代拙ゝ。店のもの今土庫ゝ入たる白布と改めるに一
反拘把ふ染たるゝぬまべ。見るん染の拿来し彼らんと思し
典へ悪捨ひよ傳費すゝ。行ることあり母に化らをぬゝ。老母
俳度に拿行へしと。白布一反渡しゝまべ。左郎ゝと接仕法ぬと
おゝひ家よりちゝゝ。母ふも伝ゝていいらく今日不易何而の人も
ゝをず。紅衣の見苦しとて。白布一反を預ひことを藍染ゝ做て。着くせ
ゝと典へゝ。老母染とて草の衣に仕立たまくといひるに母も美と

公はまいせちゐる志の人うなをて例しまいらせとしをどいひけく。
を鼎の孝と焦燥まし〳〵に先ことを軍工猛を。扱といなせど深
上をらんまに貢しに尋しるをが價に差支やがて深てはさせん
とるざめをくうら。を鼎い待うを。白地のまゝふてことをとえし。戸外
小出て拾びるに辺りの壹歩うる。衣の白紀とをて癸ひ罵々成。
を鼎大に怒を。両三個の壹代後く打倒す打うを。父てのを
系と観くみもやを鼎の系るとを打ハ。悪を拳動。とのをも眼を
ものをせて呉んづと。進まると看るうを。を鼎ハ足疾を遥をおげ
延ひ。粤を俳産のありるに。此家へを一文字を跑入居を外せ延く
盛瓶の中へ跳込。頭計を出し〳〵息を偖ゐるさま成。俳産のものども
看附。這奴何をするぞと。拳出さんとをしをべ。を鼎後くいふやう。

今ゐ家どちと壁呪をるを。親情り進まをべ。摧しのくら家
に見ハせゐいをとてゐを壺の中を浸を。首のをを出し後居る間に那
進りけ〳〵者もを鼎成見失ひ。〳〵に立かり後をべ。俳産の溪る
どもを鼎をいを出し。今ハ進来るものも那し。疾逃帰をを表てへ
実出とを。特と後く我家をはして生ゐうぬ。を鼎白布成盛
深をせんとの巧をを。忙ハ〳〵き切ふを此係を用ひしハ。猛をく悪
智の賢をる。後世おそるべき生をう後を帝へおりひのまゝに
白布と盛深と似〳〵。白中教び素をうう。母をゐを着せていへ
らく。此牙此衣を深て與へざるをへ。系の〳〵を係を廻らし。藍
深とを〳〵ゐうと。後るを字ゐう母ハ母と母びて。哭倒をさてもく
落俳家裏〳〵れば。をるを悪を拳動とをも。皆を親の科

袴垂保輔

熊坂太郎

ちうるゞ。以来ゆるさりし仕業をもて、まやうよ教訓しるる。
太郎甚右も信悪智恵まさり、あるい四りの家をあそびて。夜更
るゝ孫めまとある時ゆるして晶足を盗み、これを原をぐきとろるく。
己の足ゆ若色て云ゆるゞして。悪行悔改せるうち。父五郎又は
風の云ひと打叫。次第る病をうけ給よ。太郎十歳のれ身すうめれば
行よ弱きる。毎一個のまゝはもて。且夕の煙も立うて。灌ぎ
汲濯賃仕事よ。浪人とやつちるうち。女るのまゝ一つふて。公と言せし
白えまを。を郎十三歳の時。母も病ふを撥出し。今ハたのもそく飛く
こゝる折ゝ。母い去命と拠方よ近跟ていへらく。人の死せんとゑ
行ゆ。そのらくゝなしとゝやいまをもや妻も黄泉よ続くと覚ふ
をバ。言罪りること。雅公もまゝ〳〵ときまく。成人の后を

かるらず。悪き行ひをべゝ〳〵ず。もと海い五郎又とゝく実るよ
あるゝ。近江の国の産を。佐々木源治重実厩の徒なるゆ其
仔細といへるい。妻い素ゝ浦の女るまども。重定屋敷の帰路。
妻ゆ敷様よ憩らひ玉ひ。后吾身を石まて側安とる。年月
かゝる。佐ゝるゝ海を望りしをゝめ。後の父熊阪重長厩に
給りしゆ。后重長厩い。佐ゝ木の家内るまども。家ゆ多く
をく不客を憤をを置し。后直に江刀を立退。毒もともよ
此金沢よ蟄居の身ゝゝ。細を相ゝと立兼る中よ海の出生
実子の如く。弱ゝ云ゝ五郎又どゝゝ。即熊阪左衛門重
長ゝの形ゝ。実父といひ養父とゝ。行る節目の海もへふ吾亡后
公を潔ゝし。能き主ともゝて。父祖の家名と成いすべし。此程の

拳勇をとるゝ。なべく土のるまゝ紅とまゆへ。今孫の母の母
ひげんを護。父の名をも称すゝ。若しき中も湘水ゝ教へ
こしまゝ。一両日を経て終に敵なくゝ勝ぬゝ。五郎又と名乗
の絡とるゝ。亀沢左の強弁といつるもの。後ゝの世話とな
る。行住を鼎。永和へ恵ゝ。養育しるゝ。ぞ。ゝ。ゝ。
ゝや十五歳ゝ。ゝ。ゝ。伯父の強弁の世話とゝ。ゝ。熟
つら考へ。吾身をかちひらぐらす。母の遺言耳ゝ止ゝ。仮本
の正統として。訪撃ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。年月を送るゝ。ゝ。
ゝ。武芸を修行し。天陸海内ゝ名をゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。伯父ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

とて。晴ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
撃剣。槍術。羅刀の技を。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
巧を稽んとゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
木と対ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
四十字討の。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
曰く。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
術とゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
を教へゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
して。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
たのゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
対して。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

教日警古怠らざりきとぞ。自然と技熟し。且へ太郎の力量諸人
ふ揚き。弟ども次第〳〵上達仕しぬとおもひ。那者いへらく。今い海の
武義熟練し。故く右に出るものあるまじ。けうへい弟ども恐る恐
御とも仕へなんと。悉く秘術を教へ〳〵后弟より海諸國を巡り。
なと終りをぐし。弟ども仕へる御もゝそまでありとあらゆるべき太郎
秘首再洋に。る大人の洪恩を以て。某ゆのごく武の技を学ば
こと。ひとへに御の導きを依る。ふ。すべ今より後ひ当諸國
武者修りして名を万天ふ所いしやうん。るふても此者いかゝる
人ぞや。其姓名ともまをせたまへとあるべき。那者いつらく。弟い
這ふる森新よ。今い若むす古塚の主といへど。名も捨て名ふ
ずをもゆるまうしきとど。平井保昌の弟。保輔といつしりの又

俾弼を捧金と称へ。強盗の長なりしが。雄水荒太郎貞光の
たゆに。頼光の館よ投いま。終よ此知して。其ゆを逐たる有念の
霊魂此七よ止まり。里人崇りをなせしゆ土人一の塚と建弟と
有り盃つるが。日のもの絨首とゆらん。ふ孔ずまして亡ひ
失せ。ちうひ已せべ口惜く。速ひの送会いまど退らず。捨よ海が
志し。弟ども孔に等しゆ由べ力を合せて此往しく。武樹城仕へ
捨しゆ。絨といつども。海内の一人とまを。湖い。一り国二り國の
主とゆるまうる者ゆるく。主元まして仕へるふい。遠うよ捨らん。
今より後ふ志を後徒世よ雷名氏裏ゆせよと。励す言ふ申しよ
弟も。本国全剛の徳の奇特にして絨ん天ゆる太郎まをべ忽う
仏這よ仏と。佞ふ小耳ふもゆ及ひし。後孟保輔まに生をしや。と

まゐる。際の命ゐど遠背やべし。孤うう匿る法師武。孤ろう。世に懼しる名と鄙音おいよくば奢る長ぜしる平家の奴系。一戦る攻亡ぶし。

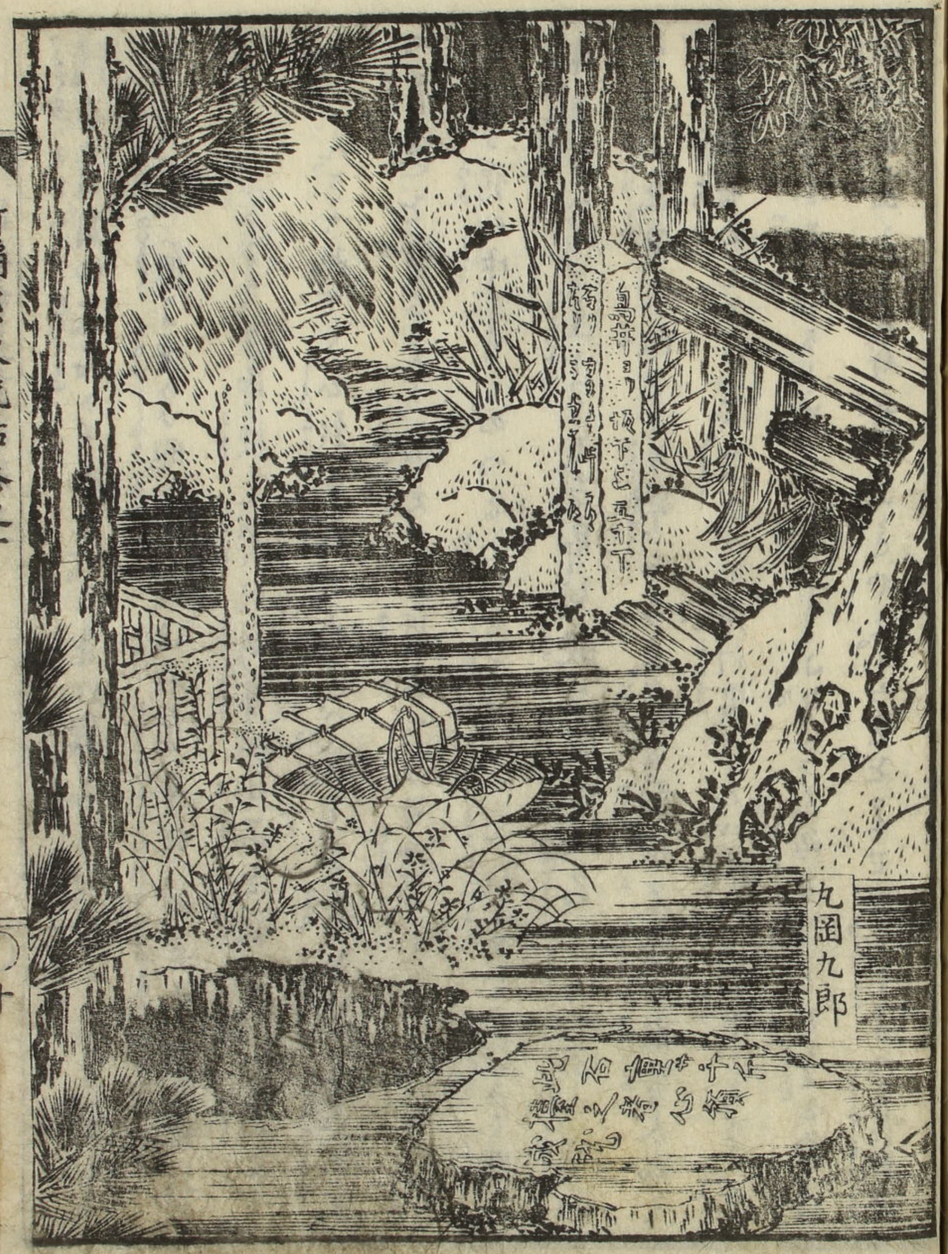
某華の義を笑させ芸んと。夢五ろう甚骨柄。保痛脇腹の孔ぢせうく。凜はしく其言武忘るさらばと学ゐる多りろとも。

糸ハ失して毒くたる山中の古塚のそぞ祈るる。を鳥ハ後を伏孫る。天ふもとる仏化して。家居ふしていひるる。

○熊阪太郎武者修行道三草野四郎話

備且熊阪太郎ハ。孤平方へ五ゆしうども。此狂の動靡もかたらず折をうかゞひ。他邦に出ぢやとかもへども。路費の仏尚あらざるば。ち何いせんと。一個業を廻らせしが。此孤平ハ馬の掛合せ巧者にて。年く弱武何五。市ふ出して。某武隠支武ば。今年も熊出生の

弱ありて。逝さふ金ふ。金ふせんと何五ふ。を郎僕俳と思ひ。金沢の街ふ馬市たてる日。ひそうふ熊弱二三足武奪出し。某と金沢の市ふ出し。售んとて。孤平方の弱い就も熊駒ゆへ馬賞共永冥ゑんと。争そひて。直値とち場。三足の弱と乗金。十乗。余ゑに賣渡しくるとば。太郎ふ中脇ひて。此金と以て先刀剣を求くる張の調度煙草ふ個へ買ふ。家ふ向らず。逝ふ国と逐電ぬし。某てのふ孔ふるとば。武者修りと志ざし。自ら熊阪を鳥長能と名乗先。隣国能登載中武路ふ出て。越前の国の今庄の四。湯尾峠といつる。を里計の山路あり。を郎一個此山中ふ差うる」頃ぞや日も西山ふ傾きぬるとど。雑所ふとバ某ふ。攫し。憩ひ往んと。峠ふ登り辺りるふ。一の祠の


九郎

熊坂太郎

侍る青目の大石ありぬまびとに撫おうけ歌まんと立ち
看まべ。石面に文字彫付あり。此石重千斤撞之者心願成就と
つゝ十二字なり。左郎歌ミ笑ひ。彩斗の小石を撞る付ぞ難こと
あらん。さりあるべ〳〵ぬ我れとあまべ。試ミる茲と撞て。茲茲至
の首途と賀せんと。彼大石に行まをうけ撞バ一ツ。石の下。
大なる穴の中より。のつと出たる大漢ゑ。月代長く延て。腰に
扶刀等なるゞ立よりて。左郎武眺め。嘗今此石を除し。汝此
るや。小冠者ゑ似ぞる力量うると。答る面体不敵の形勢。太郎も
這如曲者とて看まべ。言とうけ。汝何者ゑまバ。土中ゑ潜一あるや。亦
見ゆる小石撞るとて。など賞るふぞらん。汝力抜一と至とあゝバ。
此石自生ゑ〳〵げ看をべきやと。おうまとえせぬ事ゑの言に那者

微笑いとゞよき小冠者の大言いで力量試看ゑせんと彼の拵
ゑ撫おうけ看まべ。左郎不億之ゑ那大石ゑ両手をうけ。ひと
一声肩ゑ刎上。一振ゆて。眼より高く指撞。四五遍拿ぶりて。
もとの穴へ僻静ゑ置ゑ表之義ぜず。猶不躍看まべ。那者大に驚
ろき。這者稀見強力ゑる。汝基ゑも武芸と能せバ。一個の豪傑
ゆゑ。武御の名掛あるやと尋問ゑぞ。左郎答へて予未熟ゑども。
武の技を能せんと。此国ゑをゆるまべ。汝試ミる茲と武術と比べ
んやとつゝゑ。那者いふも汝の武芸と試むへし。勿論外ゑ異しう
あらさまべ互ゑ等る太剣と以て。撃剣比試をせんとゝ。
左郎もぬひ和形ゝと急へて。左右ゑ立列き身構へる。擂し
拵て遠と叢ぶひ。双方一斉形力と抜ぶ。切先

突兒を殺し。一往一末勇と詈ひ。志ばしが往戦ひしが。太郎焦燥
大喝一声。打込大刀を那者向丸とうち振さま。漂ふを宗方を
うしと手居し。如何を予を往えべーや。之刑ふ付棄るへ
やを乞れども。天晴勇く戦骨柄也へ。惣ゑを庇と何まじ。舎
釈くいひ。そもべ。那者を鼎と拝て。低沈るー美を君八天神
ならん。某ハ九岡九郎とて。此山林を住盗賊なり。我年月を那大
石と。肩を撓ると看て。くく力量と恐怖。まと武術も推小者る
まじ。彩をうおひあるーふるーに此山林の。青木谷と云る
住る。三草野四郎とう。盗賊の首領を出きたい互の技を試そるに
彩武義ハ。渠を及ハざるとも。力量ハまと彩強まるーふるあて今
ハ那者と久方の絡とるし。此谷間の岩屈をありてぱれを此所に出て。

那石の下なる穴の中を躲を居て。旅客と劫い剥ることを業とし
我を及ハざる程い。捕吏の面を吹呼せば。作小賊共を来るを若
あまども。某ども某一個にて。ものを余しなる者ハ。志うるを此外
啻今の働き。孫よいまぞ恐怖はして。大丈夫の拳動。彩る嘉傑
未憑浦小賊と案ぬ。孤通臭て。ものとらんも。ものを非ずと想へる
ー。彩方のうへも。ものを作ら。今まり系と俱を青木谷に
到。三草野四郎ふも。対面をし。推らく此山中を止まりたまへ。今三草
地に。ものを後ぐ。小嘍喽。三百余人ろう。某此才とおてまうて。武
義力量の程と伝法せば。列位敬び重く容ハさらハんまい。只顧
我と俱に山荘を。玉を。と勧めにまうせ。太郎も系未重ぬ。の
彩彩の。ものを。鬼神の住家といへども。撰一往んづ義ものへ。僥倖と

九岡九郎を案内者として青木谷より登り。三叉路四郎とらつて。
近國より居なを結盜の首領として。青木谷の山中より岩堡を穿ち。
廣く家屋を築き。三百余人の小賊を從へ。賊を以て義を守り。文
武の道も兼ましまして。多の小嘍囉を諸所へ出して。法
盜を働らせ。多く山林より在て。婦女を奪ひ。国の伽とし。美酒佳肴と
ありて酒宴より長し。惡樂より暮し。終て九郎九郎ハ。熊阪
太郎武行。彼の山林の岩屈より到る。先九郎中より入て。行と通せ
し小や。既て九郎ハ許多大溪る共を後へ出迎。太郎より恭礼を
做して拓し入りきい。太郎も會釈して岩屈より入中の勅賜をえて
ある。岩石とりて門戸と成し。廣大なる衙の光系。武器多く架
双へ甚ど壮麗の構なり。僅ら小三四十歩往とおもへば。ぞ賊首領

とうて。左右より小賊を率連。太郎を迎へ礼をなすとまで。
太郎も亦答礼。偖より階上を登り。の大座に出きべき郎を
先より拓位上。那賊首と先るものいへらく。某ハ郎ら三草班四郎
しらく。盜賊の首領なり。唐今某ハ九岡九郎の伝信なり。夫
客の力量武術の程をるるに。弱き入らんなり。今日何の猶ひら
ありて。ぐる豪傑より相見る。某しゞ大悦何らるれ不如。我い
まん客の雷名とまんと。ぐと態動より。新結ばるきバを郎いてく。郎ハ
江湖の侠人。佐く木常惠冠者季定のる。熊阪左衛門季長敬る養
育せられ。加加金沃より。おのて成長たる。熊阪太郎長輔しいこるれ
ゆ。今武術修りのため。あらゆる諸國を往めくるとこるに。
今日九岡九郎より。武術試を偖に此処より到まるりと

三草四郎
熊坂太郎

九岡九郎

あらくるをば。這却佐くま候の息とあるをば。由緒正しき仏名也。
我くの主と憑むもはづかしからず。先く摧くけ岩屈る此まうた
まへと共うり酒肴をもて。食意酒半酣なるころ。四郎いつく
小城共の眼を窺うせんたら。酒宴の裏なる。夫客の力量のなどと。
看とたまへと望まくをば。太郎諾して去ひ。迎りをえんるな
庭なる竹叢なる竹叢ありて。大竹生えうくをば。僻静小屋に下ろす。
二本の指を以て。那大竹の基なるよへ抓よるとえんるがさし
もの大竹ひしくと。四五尺計塾浅をぬをば。其怪力に四郎城
始め。体多の城共ほと感歎して。舌を巻て賞美をなど。太
郎奥に参してさと庭なる竹叢の狂もえせやさんま。
幾個なりも竹刀木刀の新ひ。浮るを拿出て手を去てえさく。

甚分ハ。例の祭ありくる。後うを節刀一本と拿て。待受たる。
這とこて。四郎の指揮なるたぐ。小城共数十個ぐくに浮お
と延捉。庭なる跳下た郎城眼がけ打てもをば。蜘蛛鳥などの如く
前なるへ。を後へふ躱をふ城共の去迎竹木刀ハ。蜜蜂を去
のくるをば。猛神城励ま。一齊なる去うて。太郎を追詰しと看
をむ。左右疲惑なるひ浮たる。思術の法城行ひるるをば不審や
左右の象をどらく何ぞなるとも去ます。衆皆壮然と立
後なる。忽ちとあらハを出。能力城もて一個くふ去居をば。三郎
四郎九郎九郎。おもをば声城あげ。生術の凡なるとを盛しば
懼を。左右を大発なる強て。信懇勤なる歓待なると盃ををめ且い
美女城出して酌とをらせ。酒宴の奥城深人とるしれた左右

元来婦人と好づといづて。仮びざるとくぬまび女ると退け。
只英雄豪傑の活は別とろし。這まう頼ろ。三重壮四郎い
熊阪武ろ敦し。山林のまたらきゆんるを弧ひ留ろまび犬郎も
忍て城首たらん公弧あまび今四郎を後ゆるとろ。三百余人の
トのども。自小嘍喽ゆろとおりい。生けるは志ばらく居と止ゆ。
能く彼奴おの公と拉し。味方と做て后。まと備ゆを巡らんと。
日抜武を儀じ。酒宴を長し山林よあり名が太郎ゆりくいく。弧
武彌い行といづも。文字字義は疎し。大志と懐者文盲はてい
文章逐ごからん。俳い三草野四郎い。文字もありと孔ゆまを。
家は匡崎の中。紫は字どやと。叶ろ文を四郎ふ俳ろたのを似とど。
四郎いよく頼母しくおりい。素不才といづも。字びゆる往ゆ俳へ

やうんとあろうをとび。夫ろう太郎日抜書藉は眼と洒し。まを軍
書と字び。余力あまび墨跡を彼りし。終は山林は三ケ年の星
霜を経て。悉く文武も辨へをとべ。今い太郎文武兼備の豪傑
とゆろゆ。衆皆山林の城首と作を。三重壮四郎を始。九岡
九郎。高瀬の二郎。三岡の七郎。孫彦の五郎八などいへると。宗後と
して。凡三百余人の小嘍喽を後ひ。終て熊阪太郎平
十七衆ようゆまび三草野四郎と鳥帽子親とたのを吉辰を
撰ひえ抜をして。大ひは志儀の酒宴を催し。生后熊阪い四郎
小迫ひいひろい。弟日本武者修りの公弧不備して。家に停を
本をとあるず。今ろうると備ゆを拉ゆ。巡るそのうちい。武山林の小
嘍喽い。生下小頭を間。弟ゆう来るとばらくけを優ゆへと

憑とゝ。衆皆よ列をと先。却えんと水しゝをべ九囲九帛
高徴の二帛をどいつらく。今太帛君よハ山荘の主たをべ個
他邦よ出ーゃ支業堵るらず。予く供るーまいらすんと
あゲくゝをども。左帛ゝをを不語。一個旅ゝて侵狼雖するも。又
後りの一すり。往水く攻り来らんと。薛列ーて山林と立出れば。
芝淵水く衆陪をくこん逃て。侵く無ゝとしてを別をる。

熊阪說話卷之一了

金沢文庫